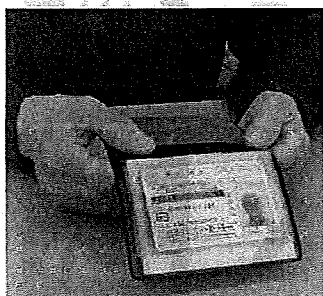


# 返納に心のフォローを

## ほかの生きがい大事

### 認知症ドライバーと運転免許証



中央線を越えても自覚がない。事故を起こしたことを忘れていた。認知症ドライバーの特徴だ。記憶力や判断力が低下し、思わぬ事故につながるかわず、運転を止めしてほしいと願う家族が多い。本人とどう向き合えば良いのだろうか。

警察庁は2005年時点、車が義務付けられたが、正で、運転免許を持つている。確な判断は難しいといわれ、認知症の高齢者を30万人と推定した。国土省大の所、日本交通心理学会の運営委員を務める石川淳也・正文教授(交通心理学)は、中央自動車学校(益岡市)が高年齢になり、さらに増えている可能性があると言っている。研究の蓄積も乏しく、摘という症状が運転行動にどう結びつくのか、そのため、とういう検査を開発すべきか、まだ分からないこと

「認知症の人と家族の会」神奈川県支部は昨年9月、会員を対象にアンケートを実施した。世話人田村加代子さんは「何十年も無事故で運転に自信を持っている人が多く、免許の返納には抵抗があるようだ」と語る。

と分析。「高齢者にとって運転することは自立の象徴。簡単に返納させるのではなく、精神的フォローや代替手段が必要だ」と話す。

坂本一美さん(74)は「仮名は1年半前、夫(70)の退職後に移り住んだ山梨県から神奈川県に戻ってきた。車好きの夫がアルツハイマー型認知症と診断されたからだ。山小屋暮らしに必要だった車は、本人の知らない間に売却。しかし夫は昨年5月、免許を更新する際に70歳以上の人に求められる高齢者講習をクリアしてしまった。

岩手県の佐藤隆さん(54)は「同様に、脳血管性認知症になった父(88)を、免許の更新を見送るよう説得した。父は坂道でサイドブレーキをはずすに駐車し自分の車にひかれるなどの事故を起こすようになっていて「他人を巻き込まない方がいい」との家族の忠告を渋々受け入れた。

国立長寿医療センター長寿政策・在宅医療研究部の荒井由美子部長らの厚生労働科学研究班は、認知症の基礎知識などをまとめた、家族のための支援マニュアルを同部のホームページ上で公開、全国の自治体にも配布する。荒井部長は「運

「夫は認知症なのに...」。坂本一美さん(仮名)が手にするのは、更新された夫の運転免許証

#### 認知症ドライバーは多くみられる特徴

- どこへ行くつもりか分からない
  - 事故を起こしたことを忘れる
  - センターラインを越えて蛇行運転
  - 交通標識や信号などの交通規則を守ることがなくなる
  - 一定の車間距離をとることができない
  - 逆走する
- 【出典：国土省大の所正文教授(高齢ドライバー激増時代)など】

転する意味や目的を考え、運転以外の生きがいや移動の手段を見つけていくことが大切だ」と話している。

# 認知症：「でも運転免許証」

中央線を越えなくても自覚がない。事故を起こしたことを忘れていた。認知症ドライバーの特徴だ。記憶力の判断力が低下し、思わぬ事故につながるおそれ、運転をやめほしいと願う家族も多い。本人とどこ向き合えば良いのだろうか。

警察庁は2009年時点で、運転免許を持っている認知症の高齢

者数を90万人と推定した。国土領大の所

正文教授(交通心理学)は、免許保有率の高い団塊世代が高齢になり、さらに増える可能性があるという指摘。研究の蓄積も乏しく、どのくらい症状が運転行動にどう結びつくのか、そのためにも

「夫は認知症なのに…」。坂本一美さん(仮名)が手にするのは、更新された夫の運転免許証



## 認知症ドライバーに多くみられる特徴？

- どこへ行こうとしていない
- 事故を起こしたことを忘れる
- センターラインを越えて蛇行運転する
- 交通標識や信号などの交通規則を守る気がなくなる
- 一定の車間距離をとる気になくなる
- 車庫入れができさない
- 逆走する

(出典：国土領大の所正文教授)「高齢ドライバー-激増時代など」

合格」と言ってもいい。たかたか後悔する。岩手県の佐藤隆さん(54)も同じ。脳血管性認知症になった父(88)を、免許の更新を長送るよう説得した。父は坂道でサイドブレーキをかけずに駐車し、自分の車にひかれるなどの事故を起こすようになった。他人を巻き込まない方がいいとの家族の忠告を

## 意味や目的の考え更新を 精神的「オロ」も必要

い検査を開発すべきか、また分からないことは多い」と語る。昨年6月から運転免許を更新する際、75歳以上の高齢ドライバーに認知機能検査が義務

付けられたが、正確な判断は難しいといわれる。日本交通心理学会の運営委員を務める石川淳也・中央自動車学校(盛岡市)社長は「疑わしい場合は、年齢に

関係なく認知機能検査を受けさせるべきだ」と語る。「認知症の人と家族の会」神奈川県支部は、昨年9月、会員を対象にアンケートを実施した。世話人田村加代子

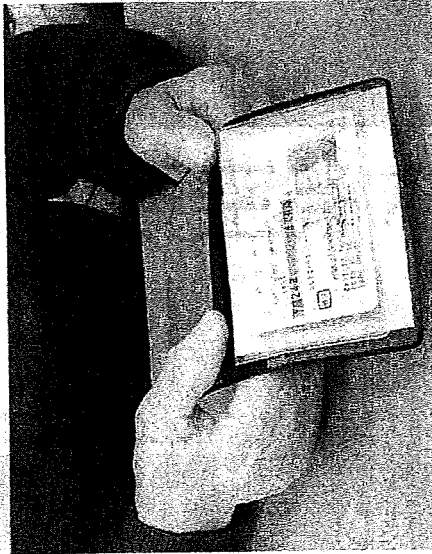
ことは自立の象徴。簡単に返答させるのではなく、精神的「オロ」や代替手段が必要だ」と語る。坂本一美さん(仮)は、区名は1年半前、夫(75)の退職後に移った山梨県から神奈川県に戻ってきた。車好きの夫がアルツハイマー型認知症と診断されたからだ。山小屋暮らしに必要だった車は、本人の知らない間に売却。しかし夫は昨年9月、免許を更新する際に70歳以上の求められる高齢者講習をうりやとしました。一美さんは教習所に不

「夫は認知症なのに…」。坂本一美さん(仮名)が手にするのは、更新された夫の運転免許証

「夫は認知症なのに…」。坂本一美さん(仮名)が手にするのは、更新された夫の運転免許証

「夫は認知症なのに…」。坂本一美さん(仮名)が手にするのは、更新された夫の運転免許証

## 認知症ドライバーにどう向き合う？

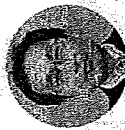


「認知症ドライバー」。塚本一孝さん(仮)が持つのは、更新された車の運転免許証

# 運転の意味と 目的を考えて

中央線を超えても自覚がない。事故を起こしたことを忘れていた一。認知症ドライバーの特徴だ。記憶力や判断力が低下し、思わぬ事故につながるが、運転をやめてほしいと願う家族は多い。本人とどう向き合えば良いのだろうか。

警察庁は2005年時点で運転免許を持つ高齢者約90万人と推定した。国土院大の所長教授(交通心理学)



所長教授 国土院大

## ほかの生きがい、手段探そう

は、免許保有率の高い環境世代が高齢になり、さらに増える可能性があると指摘。研究の蓄積も乏しく「どうして症状が運転行動にどう影響するのか、そのためにどういった検査を開発すべきか、まだ分からないことは多い」と話す。

昨年8月から運転免許を更新する際、75歳以上の高齢者に「認知機能検査」が義務付けられたが、正確な判断は難しいといわれる。日本交通心理学会の選

管長を務める石川淳也(中央自動車学校(盛岡市))は「疑わしい場合は、年齢に関係なく認知機能検査を受けさせるべき」と話す。

「認知症の人と家族の会」神奈川県支部は昨年9月、会員を対象にアンケートを実施した。世帯主の村田代子さんは「70歳未満の事故で運転に自信を持っていく人が多く、免許の返納には抵抗がある」と分析。「高齢者にとって運転するとは自立の象徴、簡単に返納すべきものではなく、精神的オアシスや代償手段が必要だ」と話す。

塚本一孝さん(74)は仮名

は、1年前(夫75)の退職後、残り半年は就職から神奈川県長官まで、車好きの夫がクルマの「認知症」診断を受けたため、山形警察署に必要書類を提出し、本人の知らない間に、更新する際、75歳以上の高齢者向けに「認知機能検査」が義務付けられた。警察署の佐藤隆さん(44)は「認知症は、免許の更新を見送るよう説得し、父は納得でサインをしないままに、勝手に自分の車にのりかえられるなどの事故を恐ろしく思うに違いない」「他人を巻き込まない方がいい」と家族の苦言を浴びた。隆さんは「身近な家族の話は聞かないことが多い。第三者に言われた方が効果があるかも」と話す。

国立高齢医療センター長 寿政英・住居医療課長の 荒井由美子部長らの厚生労働科学研究班は、認知症の基礎知識や事例に基づいた対処法、運転行動のチェック項目などをまとめた「家族のための支援マニュアル」を同部のホームページで公開、全国の自治体にも配布する。 荒井部長は「運転する意味や目的を失くし、運転以外の生きがいや報酬の手段を見つけてもらうことが大切」と話している。

### 認知症ドライバーは、多岐にわたる特徴がある

- どこへ行くかわからない
- 事故を起こしたことを忘れる
- セクションを越えて走行
- 運転速度や慣性などの交通規則を守ることがなくなる
- 一定の車両距離をとることができない
- 逆走する

→(出典：国土院大の所長教授(交通心理学)「認知症ドライバー」)

# 認知症ドライバー

中央線を越えても自覚がない。事故を起こしたことを忘れていた。認知症ドライバーの特徴だ。記憶力や判断力が低下し、思わぬ

事故につながりかねず、運転をやめてほしいと願う家族は多い。本人どう向き合えば良いのだろう。

## 認知症ドライバーに多くみられる特徴

- どこへ行こうとしているのかが分からない
- 事故を起こしたことを忘れる
- センターラインを越えて蛇行運転する
- 交通標識や信号などの交通規則を守ることがなくなる
- 一定の車間距離をとることがなくなる
- 車庫入れができない
- 逆走する

【出典：国土省大の所正文教授と「高齢ドライバー」激増時代】

「認知症の人と家族の会」神奈川県支部は昨年9月、会員を対象にアンケートを実施した。世話人田村加代子さんは「何年も無事故で運転に自信を持っている人が多

く、免許の返納には抵抗があるようだ」と分析。「高齢者にとって運転することは自立の象徴。簡単に返納させるのではなく、精神的フォローや代替手段が必要だ」と話す。岩手県の佐藤隆さんの父(88)は、脳血管性認知症になった(88)。

## 精神的なフォローが必要

警察庁は2005年時より、運転免許を持つて行動にどう結びつくのいる認知症の高齢者数をか、そのためにどういう30万人と推定した。国土検査を開発すべきか、ま単人の所正文教授(交通だ分からないことは多心理学)は、免許保有率「い」と話す。

昨年6月から運転免許の古い団塊世代が高齢になり、さらに増えているを更新する際、75歳以上可能性があると指摘。研究の蓄積も乏しい。

「関係なく認知機能検査をさせさせるべきだ」と本人の知らない間に売却。しかし夫は昨年5月、免許を更新する際に70歳以上の人に求められる高齢者講習をクリアして9月、会員を対象にアンケートを実施した。世話人田村加代子さんは「何年も無事故で運転に自信を持っている人が多

# 免許の返納に抵抗感

岩手県の佐藤隆さんの父(88)は、脳血管性認知症になった(88)。「高齢者にとって運転することは自立の象徴。簡単に返納させるのではなく、精神的フォローや代替手段が必要だ」と話す。岩手県の佐藤隆さんの父(88)は、脳血管性認知症になった(88)。

# 認知症ドライバー運転 中止支援へマニュアル

医療センター  
長寿セ

国立長寿医療センター長  
寿政策・在宅医療研究部の  
荒井由美子部長らによる研  
究班はこのほど、認知症の  
人に車の運転を中止させる  
際、家族がどのように対応  
したら円滑に止めさせるこ  
とが出来るのかなどについ  
てまとめた「介護者のため  
の支援マニュアル」を作成  
した。近年、高齢者ドライ

バーによる死亡事故の発生  
が増加しており、免許を持  
っている認知症患者の数は  
約30万人に上ると推計され  
ている。マニュアルは、ま  
ず身近な家族が認知症とい  
う病気に対する正しい知識  
を持つことで、運転すること  
で生じるリスクを理解し、  
地域の医療機関などと協力  
して取り組んでいくことが

重要だとし、具体的な事例  
を交えながらアドバイスを  
紹介している。

同研究班は07年度から3  
カ年かけて認知症高齢者の  
運転に関する社会的支援策  
のあり方について調査研究  
を続けてきた。車を運転す  
る目的が性別や年代によっ  
て異なり、高齢者の場合は  
買い物や通院などの移動手  
段のほか、運転自体を「生  
きがい・楽しみ」として捉  
えている人が割に達して  
いることなどが分かった。

このため、マニュアルで  
はまず、本人が運転する日  
的や意味を知ることが重要  
だとし、運転を止めても安  
心出来るような手立てを考  
えていくことを強調してい  
る。交通手段がない地域で  
の生活や、生計のために免  
許を手放せないなど、様々  
な事情に応じた家族の対応  
事例も紹介している。

また、認知症に対する正  
しい理解を持ってもらうた  
めの説明にもページを割い  
た。認知症の人の自立した

生活を維持することに視  
点を置き、地域全体で支援し  
ていく体制づくりに活用  
してもらいたいとしてい  
る。

マニュアルはホームペー  
ジから無料でダウンロード  
出来る。http://www.  
nls.go.jp/department/  
dgp/index-dgp-j.htm。

# 紀伊生活

## 意味や目的を考えて

### 認知症と 運転免許 必要な精神的フォロー

中央線を越えても自覚がな どどう向き合えば良いのぞろい。事故を起こしたことを忘 れていた。認知症ドライバー の特徴だ。記憶力や判断力 が低下し、思わぬ事故につな がりかねず、運転を止めてほ しいと願う家族は多い。本人

授(交通心理学)は、免許保 有率の高い団塊世代が高齢に なり、さらに増えている可能 性があると指摘。研究の蓄積 も乏しく、「どういった症状が運 転行動にどう結びつくのか、 そのためにどういった検査を開 発すべきか、まだ分からない ことばかり」と話す。

昨年6月から運転免許を更 新する際、75歳以上の高齢ド ライバーに認知機能検査が義務 づけられたが、正確な判断

は難しいといわれる。日本交 通心理学会の運営委員を務め る石川淳也・中央自動車学校

(盛岡市)社長は「疑わしい 場合は、年齢に関係なく認知 機能検査を受けさせるべき だ」と語る。

「認知症の人と家族の会」 神奈川支部は昨年9月、

「何十年も無事故で運 転に自信を持っている人が多 く、免許の返納には抵抗があ るようだ」と分析。「高齢者 にとって運転することは自立 の象徴。簡単に返納させるの ではなく、精神的フォロー や代替手段が必要だ」と話 す。

坂本一美さん(74)は仮名 11は1年半前、夫(75)の退 職後に移り住んだ山梨県から 神奈川県に戻ってきた。車好

きの夫がアルツハイマー型認 知症と診断されたからだ。山 人は「身近な家族の話は聞か ないことが多い。第三者に言 われた方が効果があるかも」と 話す。

国立長寿医療センター長寿 政策・在宅医療研究部の荒井 由美子部長らの厚生労働科学 研究班は、認知症の基礎知識 や事例に基づいた対処法、運 転行動のチェック項目などを まとめた、家族のための支援 マニュアルを同部のホームペ ージ上で公開、全国の自治体 にも配布する。

荒井部長は「運転する意味 や目的を考え、運転以外の生 きがいや移動の手段を見つ けることが大切だ」と話してい

### 認知症ドライバーに 多くみられる特徴

- どこへ行こうとしているのかが分からない
- 事故を起こしたことを忘れる
- センターラインを越えて蛇行運転する
- 交通標識や信号などの交通規則を守る気がなくなる
- 一定の車間距離をとる気がなくなる
- 車庫入れができない
- 逆走する

(出典：国士舘大の所正文教授) 「高齢ドライバー激増時代など」



# 増える認知症ドライバー

中央線を越えても自覚がな  
し、厄わぬ事故につながる  
い。事故を起こしたことを忘れ  
ず、運転をやめてほしいと願っ  
ていた一。認知症ドライバーの  
家族は多い。本人とどう向き合  
っていたか。記憶力や判断力が低下  
特徴だ。記憶力が低下  
えは良いのだろうか。

## 運転をやめてもらうには 精神的フォロー必要

警察庁は2005年時点  
で、運転免許を持っている認  
知症の高齢者数を30万人と推  
定した。国土領大の所正教  
授(交遊心理学)は、免許保  
有者の高い因襲世代が高齢に  
なり、さらに押えている高齢  
性がある指摘。研究の蓄積  
も乏しく、「このままでは運  
転行動に支障が出てくるか、  
そのためにどう検査を請  
うべきか、まだ分からない  
ことが多い」と語る。



「夫は認知症なのに...」。坂本一美さん  
(仮名)が手にするのは、更新された夫の  
運転免許証

「認知症の人と家族の会」  
神奈川県支部は昨年9月、会  
員を対象にしたセミナーを施  
した。世話人田村和子さん  
は「何十年も無事故で運転に  
自信を持っている人が多く、  
免許の返納には抵抗があるよ  
うだ」と話す。「高齢者にと  
って運転をすることは自立の象  
徴。簡単に返納させるのでは  
なく、精神的フォローや代替  
手段を検討」と語る。

川原長こときた。車好きの  
夫がアルツハイマー認知症  
と診断された。山原  
警りに驚いたのは、本  
人の知らない間に発症。しか  
し夫は昨年9月、免許を更新  
する際、医師以上に求め  
られた認知機能検査をクリアし  
てしまった。「まさか、一教  
習生と「不適合」と言っても  
らいたからだと後悔する。  
車庫の扉を開き、67  
歳の父(88)を、免許の更新を  
促さざるを得ない。父は坂  
本一美さん(仮名)に、車を  
運転し自分の身に危険な  
なると事故を起すまじらな  
い方がいい」との家族の警告  
を聞き受け入れた。慶応は  
「認知症の認知機能が低下  
し、運転行動のチェック項目を  
まごめた。認知症の発症  
マニュアルを医師の指示が  
以上公開、全国の自治体  
にも配布する。井井部長は  
「運転する意味や目的を考  
え、運転以外の生きがいや移  
動の手段を見つけることが大  
切だ」と話している。

### 認知症ドライバーに 多くみられる特徴

- どこへ行くつもりとしていない
- 事故を起したことや忘れる
- センターラインを越えて飛行
- 運転する
- 交通標識や信号などの交通規
- 交通標識や信号などがなくなる
- 一定の車間距離をとる気がな
- 一定の車間距離をとる
- 車庫入れができない
- 逆走する

(出典：国土領大の所正文教授)  
〔高齢ドライバー・認知時代など〕

# 話題

中央線を越えても自覚がない。事故を起こしたことを忘れていた。認知症ドライバーの特徴だ。記憶力や判断力が低下し、思わぬ事故につながりかねず、運転をやめてほしいと願う家族は多い。本人とどう向き合えば良いのだろうか。

警察庁は2005年時点で、運転免許を持つている認知症の高齢者数を30万人と推定した。国士館大の所正文教授（交通心理学）は、免許保有率の高い団塊世代が高齢に



所正文・国士館大教授

## 認知症と運転免許

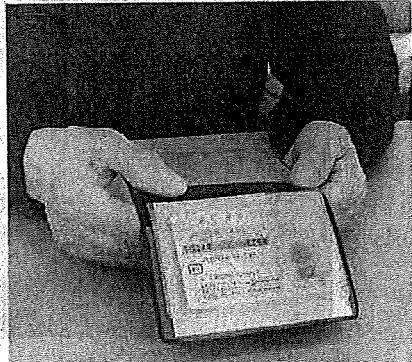
# 意味や目的を考えて

なり、さらに増えている可能性があると指摘。研究の蓄積も乏しく、「どう

いう症状が運転行動につながるのか、そのためにどういった検査を開発すべきか、また分からないことは多い」と話す。昨年6月から運転免許を更新する際、75歳以上の高齢ドライバーに認知機能検査が義務付けられたが、正確な判断は難しいといわれる。日本交通心理学会の運営委員を務める石川淳也・中央自動車学校（盛岡市）社長は「疑わしい場合は、年齢に関係なく認知機能検査を受けさせるべきだ」と語る。

「認知症の人と家族の会」神奈川県支部は昨年9月、会員を対象にアンケートを実施した。世話人田村加代子さんは「何十年も無事故で運転に自信を持っている人が多く、免許の返納には抵抗

## 精神的フォロー、代替手段を



「夫は認知症なのに…」坂本一美さん（仮名）が手にするのは、更新された夫の運転免許証

があるようだ」と分析。高齢者講習をクリアし「高齢者にとって運転することは自立の象徴。簡単に返納させるのではなく、精神的フォローや代替手段が必要だ」と話す。

坂本一美さん（74）は「夫は1年半前、夫（76）の退職後に移り住んだ山梨県から神奈川県に戻ってきた。車好きの夫がアルツハイマー型認知症と診断されたからだ。山小屋暮らしに必要な車は、本人の知らない間に売却。しかし夫は昨年5月、免許を更新する際に70歳以上の人に求められ

る高齢者講習をクリアしてしまった。一美さんは「講習所に『不合格』と書いてもらいたかった」と後悔する。岩手県の佐藤隆さん（64）も同じく、脳血管性認知症になった父（88）を、免許の更新を見送るよう説得した。父は坂道でサイドブレーキをかけるに駐車し自分の車にひかれるなどの事故を起こすようになっていて「他人を巻き込まない方がいい」との家族の忠告を素直に受け入れた。隆さんは「身近な家族の話は聞かないことが多い。第三者に言われた方が効果があるかも」と話す。

国立長寿医療センター長寿政策・在宅医療研究部の荒井由美子部長らの厚生労働科学研究班は、認知症の基礎知識や事例に基づいた対処法、運転行動のチェック項目などをまとめた、家族のための支援マニュアルを同部のホームページ上で公開。全国の自治体にも配布する。

荒井部長は「運転する意味や目的を考え、運転以外の生きがいや移動の手段を見つけていくことが大切だ」と話している。

### 認知症ドライバーに多くみられる特徴

- どこへ行くかとしているのが分からない
- 事故を起こしたことを忘れる
- センターラインを越えて蛇行運転する
- 交通標識や信号などの交通規則を守る気がなくなる
- 一定の車間距離をとる気なくなる
- 車庫入れができない
- 逆走する

（出典：国士館大の所正文教授と「高齢ドライバー・激増時代」）



# 高次脳機能障害

## 運転希望者に病院協力

脳の損傷により、時には自覚活動に支障が出る「高次脳機能障害」。運転後の生活に必要不可欠な自動車の運転を諦めなければならない患者も多い。患者支援を自覚し、病院や自動車教習所などが連携し、運転の適否を総合的に判断している。

(内田健司 写真も)

### \* 注意事項が案

岡山県玉野市で会社を運営する田中浩二さん(仮名)(60)年の自覚に気づいてから2年ほど経ち、今年年初、2年ほど前に外された。

田中さんは2007年、脳卒中を患って倒れ、「高次脳機能障害」と診断された。9か月を過ごした後は、入院先の岡山旭東病院(岡山市)でリハビリを担当した作業療法士 酒井英樹さん(29)。退院後「再びハンドルを握りたい」と、自動車教習所や県の運転免許センターに通い、運転適性検査や実技指導を受ける。田中さんに同行。そこで受けたい講習などを参考に、まずは運転の適性を確かめ、自分中心の運転をしない。田中さんの症状に合わせ、家族が同乗しながら少しずつ運転の機会を増やして来た。一人運転しても大丈夫なまでになったため、9か月からの卒業と見つめた。田中

さんは「運転とは自信があったが、適性検査の結果や教習所の指導で、より注意が必要だと感じた。運転ができない生活は考えられなかったし、仕事を辞めるとリハビリにもなる」と振り返る。

### \* 不安を抱える患者

岡山旭東病院は、入院患者



「運転が案」を前に、患者と指導士(左) (岡山県玉野市の旭東病院)

### 教習所と連携、適否探る

者のうち、約が自覚病し、そのうち約が再び運転することを考えている。時間短縮のリハビリテーション療法は、「高次脳機能障害があっても歩けたり運動機能に問題がない」と、周りからはなかなか病状を理解してもらえないことが多い。特に脳腫瘍と脳血管障害が多い。時に脳腫瘍と脳血管障害に力を入れている」と話す。リハビリ作業療法士の酒井英樹さんを運転担当とし、患者家族、運転免許センターと連携する仕組みを作り、試行を続けている。

酒井さんは「病気の後で運転できるかどうか、患者も家

「高次脳機能障害 脳卒中、脳梗塞などの病気が原因で、脳機能の一部が障害された状態を指す。症状は自覚しにくい。見えない目ではわからない。『見えにくい』と表現される。リハビリなどの支援が必要。患者は全国に約6万8000人おり、毎年約2800人が発症する」との推計がある。

高次脳機能障害 脳卒中、脳梗塞などの病気が原因で、脳機能の一部が障害された状態を指す。症状は自覚しにくい。見えない目ではわからない。『見えにくい』と表現される。リハビリなどの支援が必要。患者は全国に約6万8000人おり、毎年約2800人が発症する」との推計がある。

族も不安に思っている。運転を再開することも断念するにしても、自分なりの状況にあわせて個別に調べてもらった上で、最終は患者・家族が判断できるように情報提供するのが仕事」と話す。

高次脳機能障害と診断されて、運転免許更新の際に明確な基準が定まらなければならぬが、県の自動車運転免許センターでは2010年度、田中さんに類似した相談を受け付けている。県警運転免許課の畑田浩二主任は、「運転適性検査の結果からだけでは適否は判断できない。まずは相談者らからどうしたいのかの判断をした上で、相談に乗ってほしい」と話している。

### \* 血脈を継ぐ

運転機能を失ったため、昭和大学病院(東京都品川区)では、患者の頭にはセンサーを付け、脳血管を運送する機械を使っている。医師や作業療法士らが、複数の検査結果を踏まえた注意点を助言する。

「運転と認知機能研究会」世話人代表で、昭和大学の村将・准教授(精神医学)は「病気がよって運転にどんな影響が出るか異なり、病院での検査はあくまで運転が本当にどうかの目安。安全に問題のある患者は運転を再開する前に、自動車教習所などで実車で評価を受けるのが望ましい」と話している。

◆◆ 運転と認知機能研究会 (http://cogdrive.org/) ◆◆ 認知症高齢者の自動車運転については、国立長寿医療センターの

## 高次脳機能障害 運転希望者に病院協力(安心) 教習所と連携、適否探る

# 運転希望者に病院協力

### 高次脳機能障害

脳の損傷により、時には日常生活に支障が出る「高次脳機能障害」。退院後の生活再建に必要な自動車の運転を控えなければならぬ患者も多い。患者支援を自指し、病院や自動車教習所などが連携し、運転の適否を探る取り組みが進んでいる。

(内田健司、写真も)

#### \*注意事項9か条

岡山県玉野市で会社を経営する田中浩一さん(仮名)(60)宅の、食卓に張つてあった「運転9か条」が今年初め、2年ぶりに外された。

田中さんは2007年、脳こうそくで倒れ、「高次脳機能障害」と診断された。9か条を作成したのは、入院先の岡山旭東病院(岡山市)

でリハビリを担当した作業療法士、酒井英顕さん(29)。退院後、「再びハンドルを握りたい」と、自動車教習所や県の運転免許センターに通い、運転適性検査や実技指導を受ける田中さんに同行。そこで受けた助言などを参考に、子供が通る道は

スピードを控える、自分中心の運転をしない―など、田中さんの症状に合わせて注意事項をまとめた。家族が同乗しながら、少しずつ運転の機会を増やしてきたが、一人で運転しても大丈夫かなと、家族が思えるようになってきたため、9か条からの卒業にこぎつけた。田中さんは、「運転には自信があったが、適性検査の結果や教習所の指導で、より注意が必要だと感じた。運転ができない生活は考えられなかったし、仕事をすることがリハビリにもなる」と振り返る。

#### \*不安抱える患者

岡山旭東病院では、入院

### 教習所と連携、適否探る



「運転9か条」を手に、患者と話す酒井さん(左)(岡山県玉野市の患者宅で)

患者のうち7割が自宅復帰力を入れて」と話す。11人いる作業療法士のうち3人を運転担当にし、患者家族、運転免許センターとも連携する仕組みを作り、試行を続けている。酒井さんは「病気の後に運転できるかどうか、患者も家族も不安に思っている。特に復職と運転再開に

#### \*血流センサー活用

運転機能を判定するため、昭和大学東病院(東京都品川区)では、患者の頭にセンサーを付け、脳血流を測定する機械を使っている。医師や作業療法士らが複数の検査結果を踏まえた注視点などを助言する。

#### 「運転と認知機能研究会」

世話人代表で、昭和大学の三村将・准教授(精神医学)は、「病気によって運転にどんな影響が出るか異なり、病院での検査はあくまで運転が大丈夫かどうかの目安。安全性に問題のある患者は運転を再開する前に、自動車教習所などで実車で評価するのが望ましい」と話している。

高次脳機能障害 脳卒中などの病気が原因で、脳に損傷を受けた場合に起きる。うまく話せなかったり、新しいことが覚えられなかったり、怒りっぽくやる気が出なかったりなどの症状が見られる。症状を自覚しにくい上、見た目ではわかりにくい「見えない障害」とも言われる。リハビリなどの支援が必要な患者は全国に約6万8000人おり、毎年約2800人が発症するとの推計がある。

◆運転と認知機能研究会 (<http://cogdrive.org/>)

◆認知症高齢者の自動車運転については、国立長寿医療センターの荒井由美子部長が監修した「家族介護者の支援マニュアル」(<http://www.nils.go.jp/department/dgp/index-dgp-j.htm>)が参考になる。



(水・木曜日掲載)

■認知症ドバイバーの対処  
マニユアル 国立長寿医療セ  
ンター（愛知県大府市）長寿  
政策・在宅医療研究部は、車  
の運転を続けてきた高齢者が  
認知症になった場合の対処法  
を家族にアドバイスするマニ  
ユアルを作成した。無料でダ  
ウンロード配布している。

同センターが3年にわたつ  
て認知症の人が運転するリス  
クや社会支援の在り方など  
について研究してきた成果を生  
かした。認知症の原因別の運  
転の特徴や、運転をスムーズ  
にやめてもらうためのノウハ  
ウ、運転をやめた後の接し方  
などのアドバイスをイラスト  
付きで分かりやすく解説、事  
例紹介もある。

入手は同センターのホーム  
ページから。アドレスは  
<http://nls.go.jp/department/dgp/index—dgp—j.htm>。

# 配布無料 認知症高齢者の運転 支援マニュアル作成

国立長寿医療センター長 による無料ダウンロード配布  
 寿政策・在宅医療研究部 を開始した。  
 (荒井由美子部長)と厚生  
 労働省研究班は、3年に及  
 ぶ認知症高齢者の運転に対  
 する社会支援の研究成果か  
 ら支援マニュアルを作成、  
 このほどインターネットに

は少なくないという。研究  
 班では、社会医学的・精神  
 医学的観点から、認知症が  
 原因となる運転時のリスク  
 や運転継続が望ましくない  
 状態になった場合の対応な  
 ど、認知症高齢者の運転に  
 対する課題とその社会支援  
 策を研究してきた。この3  
 年間の研究によって明らか  
 になった成果を、社会還元  
 の一環として、支援マニユ  
 アルにまとめた。

マニュアルは、①事例紹  
 介②認知症の正しい理解③  
 認知症と運転④認知症高齢  
 者の自動車の運転に関する  
 法律⑤自動車運転に対する  
 人々の意識⑥運転者が認知  
 症になったとき⑦認知症高  
 齢者の自動車運転への対  
 応、考え方などで構成さ  
 れている。

▽配布先：国立長寿医療  
 センター長寿政策・在宅医  
 療研究部ホームページ  
<http://www.nils.go.jp/department/dgp/index-dgp-j.htm>

# 認知症と 運転免許

中央線を越えても自覚がない。事故を起こしたことを忘れていた。これらは認知症ドライバーの特徴だ。記憶力や判断力が低下し、思わぬ事故につながるが、運転をやめてほしいと願う家族は多い。本人とどう向き合えば良いのだろうか。

警察庁は2005年時点で、運転免許を持っている認知症の高齢者数を30万人と推定した。国土館大の所正文教授（交通心理学）は、免許保有率の高い団塊世代が高齢になり、さらに増えている可能性がある」と指摘。研究の蓄積も進む「ADL」症状が運

## 意味や目的を考えて



### 精神的フォローが必要

転行動にどう結びつくのか、そのためにどういう検査を開発すべきか、まだ分からないことは多い」と話す。

昨年6月から運転免許を更新する際、75歳以上の高齢ドライバーに認知機能検査が義務付けられたが、正確な判断は難しいといわれる。日本交

通心理学会の運営委員を務める石川淳也・中央自動車学校（盛岡市）社長は「疑わしい場合は、年齢に関係なく認知機能検査を受けさせるべきだ」と語る。

「認知症の人と家族の会」神奈川県支部は昨年9月、会員の対象にアンケートを実施した。世話人田村加代子さんは「何十年も無事故で運転に自信を持っていた人が多く、免許の返納には抵抗があるようだ」と分析。「高齢者にとって運転することは自立の象徴。簡単に返納させるのでは」と述べた。同氏は、脳血管性認知症に悩む岩手県の佐藤隆さん（54）の父（88）を、免許の更新を促すことに苦労した。岩手県は「教習所」に求めらるる高齢者講習をクリアして、所定「不合格」と言ってもらいたかった」と後悔する。岩手県は「教習所」に求めらるる高齢者講習をクリアして、所定「不合格」と言ってもらいたかった」と後悔する。岩手県は「教習所」に求めらるる高齢者講習をクリアして、所定「不合格」と言ってもらいたかった」と後悔する。

▲「夫は認知症なのに」。坂本一美さん（仮名）が手にするのは、更新された夫の運転免許証

見送るよう説得した。父は坂道でサイドブレーキをかけたままに駐車し自分の車にひかれるなどの事故を起こすようになった。家族の忠告を聞き入れて、父は「身近な家族の話は聞かないことが多い。第三者に言われた方が効果があるかも」と話す。

国立長寿医療センター長寿政策・在宅医療研究部の荒井由美子部長らの厚生労働科学研究班は、認知症の基礎知識や事例に基づいた対処法、運転行動のチェック項目などをまとめた、家族のための支援マニュアルを同部のホームページ上で公開、全国の自治体にも配布する。荒井部長は「運転する意味や目的を考え、運転以外の生きがいや移動の手段を見つけていくことが大切だ」と話す。

# 認知症でも運転しますか

中線を越えろとも自覚がない。事故を起こしたことを忘れていた。認知症ドライバーの特徴だ。記憶力や判断力が低下し、思わぬ事故につながりかねず、運転を止めほしいと願う家族も多い。本人どう向き合えばいいのだろうか。

## 増える高齢ドライバー

警察庁は2005年時点で、運転免許を持っている認知症の高齢者数を30万人と推定した。国土交通省の所管である交通安全センターの調査によると、75歳以上の高齢者が免許保有率の高い団塊世代が高齢になり、さらに増えている可能性があるという。認知症の増加もこのことにつながる。症状が進行行動にうつらうつらする、そのまわりのことを覚えていない、多岐にわたる検査を開発すべきが、まだ分からないことは多い」と話す。

昨年6月から運転免許を更新する際、75歳以上の高齢ドライバーに認知機能検査が義務付けられたが、正

確な診断は難しく、いわれている。日本交通心理学会の運営委員を務める山岸博也・中央自動車学校(盛岡市)社長は「難わしい場合は、年齢に関係なく認知機能検査を受けるべきだ」と語る。

「認知症の人と家族の会」神奈川県支部は昨年9月、会員登録後にアンケートを実施した。世話人田村和代さんは「何十年も無事故で運転に自信を持っている人が多く、免許の返納には抵抗があるようだ」と分析。「高齢者にとって運転することは自立の象徴。簡単に

## 移動手段、どう折り合い

返納させるのは、精神的フォローや、運転が必発」と語る。

坂本一美さん(仮名)は一年半前、夫(70)の退職後に移り住んだ山梨県から神奈川県に戻ってきた。車好きの夫はクルマが大好きで、認知症と診断されたら、山梨暮らしに必要だった車は、本人の知らない間に売却。しかし夫は昨年9月、免許を更新する際に70歳以上の人に求められる高齢者講習をクリアしてしまった。一美さんは「教習所に『不合格』と言われてもらいたかった」と後悔する。

岩手県の佐藤さん(仮名)は、脳血管性認知症になった父(88)を、免許の更新を見送るよう説得した。父は坂道をサイドブレームかけずに駐車し自分

の車にひかれるなどの事故を繰り返すようになっていて「他人を巻き込まない方がいい」と家族の希望を断り、夫は身近な家族の話は聞かないことが多い。第三者に言われた方が効果があるかもと語る。

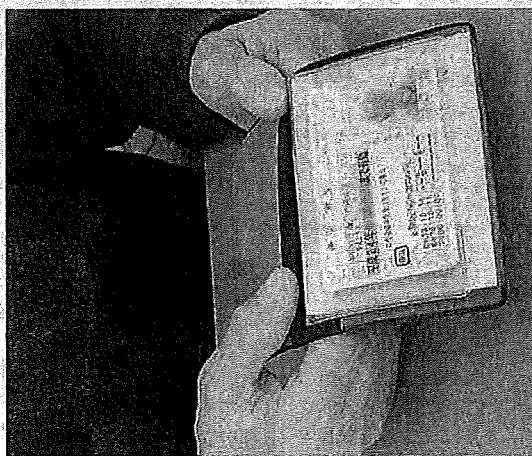
国土交通省医薬センター長兼政策・在宅医療特別部会副部長の野村芳樹は、認知症の基礎知識や事例に基づいた対処法、運転行動のチェック項目などをまとめた「家族のための支援マニュアル」を同部のホームページで公開。全国の自治体にも配布する。

野村部長は「運転する意味や目的を考え、運転以外の生きがいや移動の手段を見つめることが大切だ」と話している。

## 認知症ドライバーは、どこへ行くのか

- 認知症ドライバーは、どこへ行くのか
- 事故を起こしたことを忘れる
- センターラインを越えて蛇行運転する
- 交通標識や信号などの交通規則を守る気がなくなる
- 一定の車間距離をとる気にならなくなる
- 車庫入れができない
- 逆走する

(出典：国土交通省の所管である交通安全センターの調査)  
(高齢ドライバー、認知症)



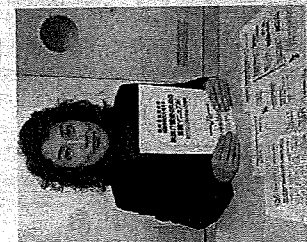
「夫は認知症なのに...」坂本一美さん(仮名)が手にするのは、更新された夫の運転免許証





# 危険自覚へ話し合いを

「車の運転をためしにして、押入れに入れてほしい。運転する運転手が認知症になったら、こんな悩みを抱く家族の姿が、厚生労働省の研究会がエッセイを作った。研究会の会長で国立長寿医療センター（愛知県大府市）長寿政策・生涯健康研究所の若井由幸所長は、高齢者にとっての車の運転と認知症の関わりについて書いた。（佐藤大）



マニエアルに詳しい認知症専門の国立長寿医療センターで、若井由幸所長が「認知症と車の運転」の冊子について説明している。

四畳半のいすばあし、だ、しかし、本人が事故十五歳以上の突然に、動けなくなり、加害者になり、家族は泣き寝入り、家族の間に折り合いがつかない。認知症の人の運送の特長は、車を知らず、運転が上手で、事故を繰り返す。認知症の症状に気づいたら、家族は早急に車を運転させない。認知症の症状に気づいたら、家族は早急に車を運転させない。認知症の症状に気づいたら、家族は早急に車を運転させない。

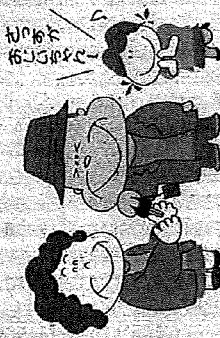
「高齢者にとって、運転は単なる移動手段ではなく、生きがいや自立の象徴である人が多い。家族はそれを頭に入れておいて、「危井さんは呼び掛ける。研究会が二〇〇七年、四十歳以上の運転者約五百人を対象とした調査では、車の運転を生きがい「感じる」「自分の象徴」と考える人は、六十

## 認知症

## 運転、卒業、促すには

# 代わる生きがい、一緒に探して

認知症でも症状はさまざま	アルツハイマー型認知症	脳血管性認知症	レビック病
認知度の低下	取り柄のないもの忘れ	発症後、徐々に進む	進行が速く、短期間で認知機能が低下する
運転行動	運転中にいきなり停止する	運転中の注意力が低下する	運転ルールの理解が困難になる



十五歳以上の本人、家族は生きがいを感じる。認知症と運転の関わりは、運転免許の取得から、運転ルールの理解、運転中の注意力の低下、運転ルールの理解が困難になる。認知症と運転の関わりは、運転免許の取得から、運転ルールの理解、運転中の注意力の低下、運転ルールの理解が困難になる。認知症と運転の関わりは、運転免許の取得から、運転ルールの理解、運転中の注意力の低下、運転ルールの理解が困難になる。



「認知症高齢者の自動車運転を考える  
家族介護者のための支援マニュアル<sup>®</sup>」  
ダウンロード配布開始

【内容】

国立長寿医療センター(愛知県大府市)長寿政策・在宅医療研究部 荒井由美子らは、2007年度から2009年度にかけて「認知症高齢者の自動車運転に対する社会支援のあり方に関する検討」(厚生労働科学研究費補助金 認知症対策総合研究事業)研究班として、認知症高齢者の運転について家族介護者への支援を目的とした研究に取り組んできた。その結果を踏まえ、作成したマニュアルの無料ダウンロード配布を開始する。

本マニュアルは、自動車運転を続けてきた高齢者が認知症になった場合の対処法を家族介護者にアドバイスするものとなる。

【概要】

タイトル/「認知症高齢者の自動車運転を考える  
家族介護者のための支援マニュアル<sup>®</sup>」

内容/

事例紹介

第1章：認知症の正しい理解

第2章：認知症と運転

第3章：認知症高齢者の自動車の運転に関する法律

第4章：自動車運転に対する人々の意識

第5章：運転者が認知症になったとき

フローチャート：認知症高齢者の自動車運転への対応、考え方

体裁/A4判、カラー、全36頁、PDF版のみ

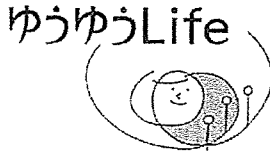
配布方法/以下、国立長寿医療センター長寿政策・在宅医療研究部ホームページよりダウンロード配布

<http://www.nils.go.jp/department/dgp/index-dgp-j.htm>

【ダウンロード方法などに関する問い合わせ先】

TEL：03-3370-2085(PDリサーチ株式会社内)

生活



「のんびり「ゆう」を運転中の漫画家、赤羽みちえさんは父親の生前、運転をやめさせようと思っただけで、その思いは、今も赤羽さんに一抹の痛みを引き起こす。

最初に父親の運転が怪しいことに気付いたのは母親の入院中だった。赤羽さんを助手席に乗せて病院へ向かう途中、父親が道を忘れたり、間違えたりしたのだ。「最初は年のせいかなと思いましたが」と赤羽さん。だが、前日に話したことも覚えていないなどの症状が出て、母親のケアマネジャーから検査を勧められた。しかし、父親は病院に行こうとしない。「父に健康だと確認するために脳ドックに入ってみないか？」などと言いましたが、だめでした。知るのがショックだったんだと思います。」

運転をやめさせたいが、車がなければ買物もできない。一念発起した赤羽さんは自ら運転免許を取った。「田舎だから切実でした。私が運転できれば、やめてくれるかと思っただけで、「買物の都度、車を出すか

高齢の親の運転が心もとない。やめさせたいが納得できない。介護経験のある家族には珍しい悩みだ。国立長寿医療センターの荒井由美子医師らのグループが、こうした家族向けに「支援マニュアル」を作成した。認知症の原因となる疾患別に、運転で生じる問題点なども解説。患者と家族の側に立つて、運転中止に向けたアドバイスをしている。インターネットで無料ダウンロードできる。

（佐藤好美）

# 認知症の運転中止 家族向けマニュアル作成

## 認知症の原因疾患による症状の違いと運転行動

	アルツハイマー病	びく病	血管性認知症
記憶	いつ、どこでといった記憶を思い出せない(出来事記憶の障害)	言葉の意味、物の名前が分からず会話が通じない(意味記憶の障害)	いつ、どこでといった記憶を思い出せない(出来事記憶の障害)
場所の理解	侵される	保たれる	侵されることもある
普段の態度	もっともらしい態度や反応を示す(取り繕い・場合わけ)	同じことを繰り返す、こだわり続ける(我が道を行く行動、常同行動・固執)	わずかなことで急に泣き出したり、怒ったりする(感情失禁) 意欲低下
運転行動	運転中に行き先を忘れる 駐車や横寄せが下手になる	交通ルール無視 運転中のわき見 車間距離が短くなる	運転中にポーツとするなど注意散漫になる ハンドルやギアチェンジ、ブレーキペダルの運転操作が遅くなる

※「認知症高齢者の自動車運転を考える 家族介護者のための支援マニュアル」から

## 「車なしの生活」に道筋 運転に代わる楽しさを

「5」とも言いましたが、隠れて乗るんです。いっそ、年齢で区切って強制的に免許を取り上げてほしいとも思いました」

ある日、車を門柱にぶつけた事故を知った赤羽さんは、父親を悪々と諷得。父親は「分かっていた」と答えた。しかし、その2日後に亡くなった。赤羽さんは「家族で旅行するごときも、運転は大抵お父さんの役目。免許は父にとって本当に大切な物だったんだと思います」と話している。

ドライバーが認知症の場合、公安委員会は免許を取り消すことができず、75歳以上は免許更新時に認知機能検査を受けることが義務付けられている。しかし、運転継続は比較的事業的であり、家族の悩みの切実さ。認知症高齢者の自動車運転を考える 家族介護者のための支援マニュアルを作ったのは、国立長寿医療センターの荒井由美子長寿政策、在宅医療研究部長ら5人。いずれも認知症などを専門とする医師や研究者らだ。

作成の動機を、荒井部長は「認知症の症状が進行してくると、運転を継続することは本人の安全の観点から難しくなってくる。しかし、車がなくなると通院もできない地域もある中で、車なしでの(日常)生活の道筋をつくらなければ、運転を中止したくてもできない患者さんや家族も多い。認知症という病気についてもよく理解されたい。家族だけでなく、自治体や運転免許センターなどが共通認識を持ち、患者さんやご家族を支援する環境を整える一助にしたい」と言う。

「認知症高齢者の自動車運転を考える 家族介護者のための支援マニュアル」は次のURLからダウンロードできる。http://www.nils.go.jp/department/dgp/index-dgp-j.htm

マニュアルでは、認知症の原因疾患別に運転行動を解説。本人と家族の第一歩に「正確な診断を受け、病気をよく理解すること」を挙げた。

運転中止が難しいのは、本人に危険性の認識がないためとはかきらない。地方では運転は暮らしの生命線だから、運転を中止するには通院や買い物、足元を探すことも重要だ。

マニュアルでは、代替案として、病院や福祉施設の送迎バス▽乗り合いバスや予約制乗り合いバス▽介護タクシーや福祉タクシーなどを挙げた。また、親族には週末の買い物と一緒に

出かける工夫を求め、食材や生活用品の宅配サービスの利用後、頼も促した。

さらに、「運転が生きがい」というケースも少なくない。荒井部長らのアンケートでは、運転の目的を仕事や通勤、買い物などの「移動手段」とした人は7割。半面、「楽しさ」「生きがい」「自立を示すもの」などとした回答も3割に上り、特に高齢者にその傾向が強かった。

このため、車に代わる楽しさを見いだすことも重要だ。マニュアルは、生きがいづくり活動▽老人クラブ▽介護予防教室▽生涯学習▽住民交流▽温泉施設への送迎サービスなどを示した。運転に代わる楽しさを

探るだけでなく、運転中止による活動最低点を防ぐ効果もありそうだ。

運転中止ができて、認知症の人は運転をやめなくて自分を忘れてしまうこともある。主治医に運転中止に関するメモを書いてもらい、冷蔵庫などに貼って張り付けておくなどの工夫も示されている。

マニュアルにも、運転中止の切り札はない。しかし、こうしたマニュアルが出たことについて、冒頭の赤羽さんは「父にどうして免許がとれどと大事なものが、私は亡くなるまで気付かなかった。それが分かるだけでも、家族はきっと慰められると思います」と話している。



# 「運転やめて」説得の手引

厚労省研究班

高齢者が認知症になったとき、自動車の運転をやめさせるための家族向けマニュアルを厚生労働省の研究班が作成した。移動の代替手段や、運転以外の生きがいを考えてあげることが大切だとしている。

初期のアルツハイマー病と診断された70歳代前半の男性は、運転中に行き先を忘れてたり、車庫入れに失敗したりすることがあり、医師から運転中止を勧められた。自損事故も起こしたが、男性は「運転は生きがい。運転できないなら死んだ方がいい」とかたくなに運転中止を拒否。そこで家族が運転したり、地域の移動支援サービスを利用してタクシーを使うようにさせたところ、次第に運転機会が減り、本人も自分の意思で運転をやめたという。

このようにマニュアルでは、代わりの移動手段をさがすことや、趣味の講座などで運転以外に楽しみとなるものを見つけることをアドバイスしている。

## 高齢者の家族向け

道路交通法では、認知症と判断されれば、運転免許の取り消しや停止の対象になる。昨年6月からは、75歳以上の高齢者が免許更新時に認知機能の検査を受けることも義務づけられた。自らの判断で免許を返納することもできる。

しかし、自動車の運転をやめることに抵抗を感じる高齢者も多い。家族も、本人の行動を制限することに罪悪感があり、説得に消極的な場合がある。

このため「マニュアルには、参考となる実際の事例を掲載した。

### 運転を中止させるためのアドバイス (マニュアルから抜粋)

- 週末の買い物などに家族と一緒に出かける工夫を。一人暮らし世帯では、隣人らに移動の援助を依頼。移動は市区町村の窓口で尋ねる
- 「鍵隠し」「車隠し」は最後の手段。本人の興奮や被害妄想を悪化させ逆効果になることも
- 運転中止後は、デイサービス・デイケアの利用、趣味の活動を取り入れる
- 認知症の場合、自動車の代わりに電動車いすや自転車を利用することは事故の危険が高くすすめられない。なるべく公共交通機関などの利用を

趣味を見つけて \* 「鍵隠し」逆効果も



移動支援には、NPOなどが有償で行う送迎サービスや、自治体が高齢者らのタクシー代の一部を補助するサービスなどがある。地域によって内容が異なるため、自治体の高齢者担当課で確認する必要がある。

運転中止がうまくいきそうもない場合は、家族が車に同乗し、①センターラインを越える②路側帯に乗り上げる③車庫入れに失敗する④ふだん通らない道に出ると、急に迷ってしまう⑤ふだん通らない道に出ると、パニック状態になる⑥車間距離が短くなる⑦などの問題がないかメモにして、主治医や警察、免許センターに相談することを勧めている。

患者が、運転中止を約束したことを忘れる場合もある。「あなたはもの忘れが始まっている、安全に運転することが難しくなっています。この場合、運転を続けることは危険である、法律でも定められています」などの文書を主治医に書いてもらい、目につくところに張っておくのも効果的。患者が運転したいと言いついたら、「主治医の先生に言われて運転はしないと約束したでしょう」と説得する。

研究班の推計では、運転免許を保有する認知症患者の数は約30万人に上ると見られる。

研究班の代表で「国立長寿医療センター」長寿政策・在宅医療研究部長の荒井由美子さんは、「頭ごなしに運転をやめてと言っても本人が納得しない場合が多い。長年続けていた運転を中止することに、温かい言葉をかけてねぎらい、車なしでも自立した生活ができる環境を整えてあげてほしい」と呼びかける。

マニュアルは同研究部のホームページ（<http://www.nils.go.jp/department/agp/index-dgp-j.htm>）で公開している。